

研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-133	A-151	24-009	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)			
Association between adolescent alcohol use and cognitive function in young adulthood: A co-twin comparison study 青年期のアルコール使用と若年成人期の認知機能との関連：双子比較研究			
執筆者			
Cooke ME, Stephenson M, Brislin SJ, Latvala A, Barr PB, Piirtola M, Vuoksimaa E, Rose RJ, Kaprio J, Dick DM, Salvatore JE.			
掲載誌			
Addiction. 2024 Nov;119(11):1947-1955. doi: 10.1111/add.16629. Epub 2024 Aug 6.			
キーワード			PMID
青年期、アルコール、認知、酩酊、言語能力、WAIS 語彙、若年期			39108000
要 旨			
<p>背景：青年期のアルコール使用と認知に関する研究では、アルコール使用が認知に及ぼす潜在的な因果関係を、認知との関連も知られている遺伝的影響や他の物質使用の併存等の病因的影響から分離できないことが多い。本研究では、測定された交絡因子と測定されていない交絡因子の両方を考慮することによって、青年期のアルコール使用と若年成人の認知との関係を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：フィンランドの縦断的研究 FinnTwin12 の参加者から 812 人（58.6%女性、361 組の双子、146 組は一卵性双生児 (MZ)）を分析対象とした。思春期のアルコール使用は、使用頻度と酩酊の頻度で指標化され、14 歳と 17 歳の平均値で測定された。認知的転帰は平均 22 歳時に測定され、トレイル・メイキング・テスト、カリフォルニア・ストループ・テスト、ウェクスラー成人知能下位検査（語彙、ブロック・デザイン、デジット・シンボル）、ウェクスラー記憶尺度のデジット・スパン下位検査、メンタル・ローテーション・テスト、物体位置記憶テストを用いて実施した。双生児が共有する未測定の影響的・環境的交絡因子を考慮したランダム効果モデルを用いて、性別、親の教育、一般的認知能力、現在のアルコール使用、ニコチン使用で調整し、全標本および MZ において、重回帰分析をおこなった。</p> <p>結果：青年期におけるアルコール使用頻度および酩酊頻度が高いほど、語彙スコアの低下と関連していた【双生児研究法 [使用頻度：標準偏回帰係数 $\beta = -0.12$, 95%信頼区間 (CI) = $-0.234, -0.013$] および MZ に限定した双生児研究法 [使用頻度：標準偏回帰係数 $\beta = -0.305$, 95%CI = $-0.523, -0.087$; 酩酊頻度：標準偏回帰係数 $\beta = -0.301$, 95%CI = $-0.528, -0.074$】。</p> <p>結論：フィンランドでは、青年期の飲酒が若年期の認知障害を引き起こすことは確認されず、青年期の飲酒が若年期の語彙力の低下と関連していることが示された。</p>			